

（あの坊ちゃんが、こんな姿になるなんて…）

頬を上気させ息を乱すディーノは自分の想像したものよりずっと淫靡で、ロマーリオは思わずゴクツと唾を飲む。

ディーノは未だにコウノトリを信じているような、純真無垢な天使のような子なのだと心のどこかで神聖視していた。

だが、もう既に自慰の経験があると知り、実際にその姿を目の当たりにして、ディーノも自分と変わらぬただの一人の男なのだと認識させられる。

幼い頃から傍で見えていたから、全てを知っているような気になっていた。

自分の知らないディーノの一面を知り、今まで見えていなかったディーノの本当の姿に触れたいと、そう思ってしまった。

『ロマにやら、嫌じゃないもん』

そう言葉を漏らした今のディーノなら、こんな愚かなことを考えてしまっている自分でも受け入れてくれそうな気がして心が揺れる。

（イカン、イカン、イカン！ だからさっきから何を考えてるんだオレは！！ 坊ちゃんも男だったと分かったから何だ。それでも坊ちゃんがキャバッローネの…オレらの大事なボスであることには変わらねえ。ボスに対してこんな気持ちになるなんて、部下としてあるまじきことだ。オレまで変になっちまってどうする！）

ロマーリオは吸い寄せられるように伸ばしかけ

た手を引き戻し、己の頬をびしゃりと叩いた。

（オレは坊ちゃんの…いや、キャバッローネ10代目の右腕だ。オレが今ここにいるのは、媚薬のせいで辛い思いをしているボスを助けるためだ。個人的な感情は捨てろ）

眉間に指を当てて固く目を閉じ、右腕としての自分を呼び起こす。

ロマーリオが再び目を見開いたその時、表情はいつものソレに戻っていた。

そのまま努めて冷静に、泥はねでも拭うかのようディーノの頬やバジヤマに飛び散った白い飛沫をティッシュで丁寧に拭いていく。

迸る精を受け止めてベトベトになってしまった右手も綺麗にしてやろうと、手首を掴んだところで不意にその腕を掴まれ、体がビクッと痙攣した。

「坊ちゃ…ボス、気が付いたのか」

突然ボスと呼ばれディーノは悲しげな表情を浮かべるが、それには気付かぬ振りをして、あくまでも部下として冷静に声をかける。

しかし、せつかく呼び起こした『部下モード』の自分も、ウルウルと瞳を潤ませ、吐息混じりに言葉を吐き出すディーノにいとも簡単に崩されてしまった。

「ロマあ…イッたのに、ダメ…チ×チ×がビクビクしてたまんまで、全然治まんないよお…」

一部下として対処しようと、そう固く決心したはずの心が大きく揺らぐ。